

柵を越えた

ムジーク(音楽)

MUSIK

PART III



今から100年前の1917年(大正6年)8月14日、ドイツ俘虜習志野収容所で歌が生まれました。
「閉じておくれ 僕の眼を」(ハンス・ミリエス作曲)。この調べにのせて、「ならしの洋楽事始め」をひも解くと…

2017年8月3日(木) 2:00pm 開演(開場 1:30pm)

習志野市民会館(京成大久保駅前) TEL: 047-476-3213

チケット代: おとな2,000円 こども1,500円(小学校6年生まで)

前売り: おとな1,700円 こども1,000円

～プログラム～

曲 目: 閉じておくれ 僕の眼を / 舞踏への勧誘 / 春の声 / オペレッタ「ゲイシャ」よりハッピージャパン
桜の花(チェリー) / 俺たちチャコーラス野郎(「クルツファルプの獵兵」替え歌) 他

特別ゲストによるお話: 「世界の中の習志野俘虜収容所」

～出演: 町の音楽好きネットワーク～

聲(こえ) / 大田中 早苗(鷺沼台3丁目)・戸田 志香(本大久保3丁目) 提琴(ヴァイオリン) / 樋口 菜穂美(谷津1丁目)

洋琴(ピアノ) / 林 麻由美(東京・葛飾区)・三代川 恭子(市川市)

特別ゲスト / 大津留 厚(神戸大学名誉教授)

柵を越えたMUSIK

町の音楽好きネットワークによる、習志野俘虜収容所の調べを奏でる音楽会は5回目になります。収容所で暮らしていたドイツ兵たちにとって音楽とは何だったのだろう、と思いを馳せることは、私たちに
 にとって音楽とは何かという問いに繋がります。
 この世を旅立ったドイツ兵たちの魂が、私たちの調べに微笑んでくれることを願っています。

ハンス・ミリエス (1883~1957)

1883年ダーゲビュル生まれ。父は牧師。
 ベルリン高等音楽院でヴァイオリンを専攻。巨匠ヨアヒムに師事。
 1910年~ 上海工部局管弦楽団でコンサートマスター兼副指揮者。
 1914年~ 1919年 習志野俘虜収容所。



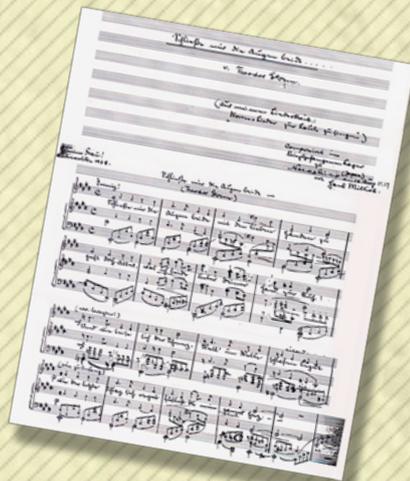
習志野俘虜収容所、音楽室のハンス・ミリエス氏

歌曲「閉じておくれ 僕の眼を」

作詞:テオドール・シュトルム 作曲:ハンス・ミリエス 訳詞:小島 泰

閉じておくれ 僕の眼を
 君の愛らしい手で
 すると君の手の下で
 僕の悩みはすべて
 眠りにつくだろう

悲しみが そっと波を打って
 眠りにつく時
 その波の最後のひと寄せが
 打ち寄せる時
 君は僕の心を充たすのだ



100年前の1917年(大正6年)
 8月14日。ドイツ俘虜習志野収容所で生まれた歌。
 ハンス・ミリエス自筆による譜面。

ある俘虜の回想録より

ミリエス上等兵曹はもの静かで温厚。ほとんど毎週日曜と金曜日に大音楽会をおこなった。いつもきちんとプログラムに従い、芸術的な完成度であった。私たちがのちに自由の身となってからでも、これほど輝かしい管弦楽を故国で聞いたことは、ついぞなかった。クラシック音楽の高級な芸術に、あまり十分な理解がなかった戦友たちにも、雰囲気味あわせるために、ミリエスは時折「ポピュラーコンサート」を開いた。

おおつる あつし 大津留 厚 さんによる『世界の中の習志野俘虜収容所』のお話

大津留厚さんはハプスブルク帝国史、オーストリア近現代史がご専門です。東京大学大学院国際関係論専攻博士課程単位取得退学。本年3月まで神戸大学大学院人文学研究科の教授をなさっていました。主な著作は「捕虜が働くとき 第一次世界大戦・総力戦の狭間で」(人文書院)、「ハプスブルク史研究入門—歴史のラビリンスへの招待」編著(昭和堂)、「ウィーンとヴェルサイユ—ヨーロッパにおけるライバル宮廷」共訳(刀水書房)。神戸大学在職中は、産官学で取り組んだ青野原俘虜収容所(兵庫県小野市)プロジェクトの中心的役割を果たされていました。

*

お話くださる「世界の中の習志野俘虜収容所」は、「習志野俘虜収容所」が日本での“モデル収容所”の役割を果たしていたこと。そして当時の日本の六つの収容所はユーラシア大陸の俘虜収容所群島の東端を形成しており、そこでおこなわれていたコンサートや演劇は、ユーラシア各地の収容所の一角でのパフォーマンスだったということを、演奏を交えながら語っていただきます。

協力:星昌幸
 写真提供:表面左<習志野俘虜オーケストラとハンス・ミリエス>/ローゼマリー・オクセンドルフ 表面中<楽譜>/ミリエス家 表面右と裏面<ハンス・ミリエス>/ミリエス家
 表面上<習志野収容所全景>/「大正3・4年戦役俘虜写真帖(俘虜情報局)より」国立国会図書館所蔵